

支部だより

～中国四国支部活動報告～

楯 真一^{1,2}

¹ 広島大学大学院理学研究科

² クロマチン動態数理研究拠点

中国四国支部は、前身となる四国支部の発足から本年でちょうど10年目の節目をむかえました。初代支部長である徳島文理大学学長・桐野 豊先生のご尽力により、中国四国地区の生物物理研究者の交流の場として中国四国支部活動も定着して参りました。

中国四国地区と一つにまとめられますが、瀬戸内海があり、本州・四国それぞれの中心には山があるために、実際にはこの地区は大きく日本海側、瀬戸内本州側、瀬戸内四国側、太平洋側の4つの地域に分断されているような感じがあります。瀬戸内本州側には新幹線があるため、山口、広島、岡山の行き来は比較的容易ですが、中四国地区の研究者全体が横のつながりを構築するには、特別な仕組みがなければなかなか実現するものではありません。その意味でも、桐野先生が育ててこられた中国四国支部の活動、特に支部大会は大変に重要な役割を持ちます。

私自身は広島に着任以来10年目となりますが、近年は、この地区にも生物物理学の若手ホープと呼べる活発な研究者が続々と着任してきており、10年前に比べると随分と中国四国地区の生物物理研究者層も変わってきました。まだ、支部としての活動は発展途上という感じはありますが、新たに加わった若手研究者を中心に少しずつ活気づいてきています。本支部だよりでは、第8回中国四国支部大会の報告を通して、変わりつつある中国四国支部の活動の様子をお伝えできればと思います。

第8回中国四国支部大会

本年の支部大会は、初代支部長・桐野 豊先生が学長を務められている徳島文理大学香川校・薬学部の岸

本泰司先生（実行委員長）、富永貴志先生、植木正二先生、窪田剛志先生、小林 卓先生、定本久世先生、白畑孝明先生が実行委員となり5月28日（土）29日（日）の二日間にわたり、香川県高松市にある高松テルサで開催されました。51名の参加者を得て32演題の発表がありました。

昨年の支部大会の総会で、支部大会で学生が研究発表するためのインセンティブを与える必要があるという提案があり、第8回からは「若手発表優秀賞」が設けられました。生物物理学会年会での口頭発表が英語を使用することになっていることを受けて、顕彰を希望する学生は、英語で口頭発表を行うことを要件としました。研究内容と共に、英語による発表の技能や、英語による質疑応答の様子を評価しました。

はじめての試みでしたので、発表する学生にも実行委員にも多少の戸惑いがありましたが、6名の学生が元気よく発表して（いろいろな意味で）会議を盛り上げてくれました。生まれてはじめての学会発表を英語でやることになり、「二重の緊張」を強いられることになるため発表する学生達の心理的負担は大きいかもしれませんが、上手く行かなくても支部大会という小さな規模の会議ですので、失敗を恐れずに挑戦してもらいたいというのが支部メンバーの思いです。質疑に立った先生方も「寛容な心」で対応くださり、良い雰囲気での英語発表練習の場が提供できたと感じました。

来年度の支部大会でも同様の取組を継続して、学生の英語による発表を訓練する場として定着させてゆければと考えています。

栄えある第1回の若手発表優秀賞の受賞者は、岡山大学大学院・医歯薬総合研究科（薬学系）・土井聡子さん（指導教員：須藤雄気教授）が受賞されました。演題名は、「アニオンチャネルロドプシン2は光依存性O⁻/H⁺対向輸送体として機能する」で、緻密に研究



第8回中国四国支部大会・参加者集合写真



第 8 回中国四国支部大会・若手発表優秀賞受賞者
岡山大学院・医歯薬 土井聡子さん

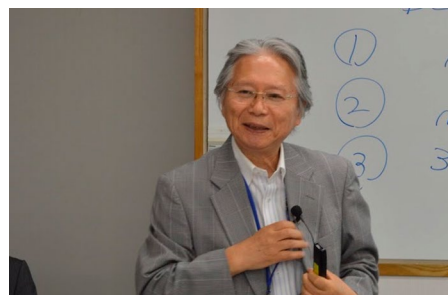
を重ねてきた様子がよくわかる、大変にレベルの高い研究発表でした。英語による発表もよく練習されていたようでわかりやすい内容でした。質疑応答でも堂々と受け答えされ、修士課程の学生とは思えない立派な発表でした。

支部大会は、もちろん学生の発表練習の場を提供するだけではなく、中国四国地区にいる生物物理学の研究者相互の研究紹介の場でもあります。毎回、若手研究者を中心として、それぞれの研究者が進めている最新の成果の報告もあり、いろいろなアイデアを頂くと同時に、共同研究を開始する良いきっかけとなっています。

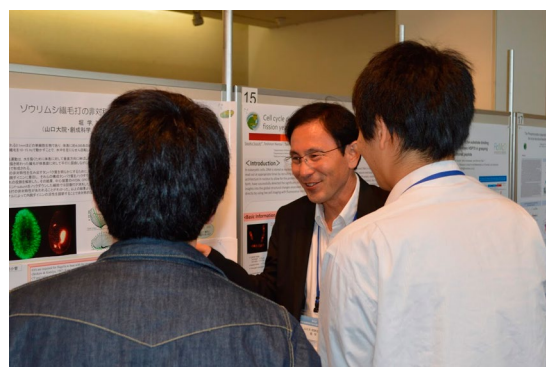
今回は、岡山大学院・医歯薬の須藤雄気先生が、岡山大学に着任して以来はじめて支部大会に参加して支部会を盛り上げてくれました。徳島文理大学・薬学部（徳島）の田中好幸先生も、昨年着任されて以来、今回はじめて支部大会で発表をされ、DNA 構造生物学の最近の研究成果を報告されました。

徳島文理大学香川薬学部の富永貴志先生、岸本泰司先生、神野直俊先生からは、徳島文理大学香川が得意とする脳神経系の研究成果がまとめて発表され、徳島文理大学香川校の研究グループの存在感を示しました。関連して、徳島大学・吉村 弘先生からは、大脳皮質神経のオシレーションシグナル伝達という興味ぶかい研究成果が報告され、徳島地区を中心とした脳神経研究の新しい研究者コミュニティが形成されつつあることがわかりました。

本報告の冒頭で述べましたように、今回は支部大会としては 8 回目ですが、支部としては 10 年目の節目



中国四国支部 10 周年記念講演をされる
初代支部長・桐野 豊先生



ポスターセッションでの討論の様子

でもあるため、初日の最後は、初代支部長・桐野 豊先生による 10 周年記念講演が行われました。いつもの飾らないお人柄そのままの語り口で、これまでのご研究における様々な転機と、その時々に出会った研究者との交流を通して得られた教訓や示唆についてユーモアを交えてお話くださいました。特に、学生や若い研究者にはいろいろな示唆に富んだ内容だと思いました。

中国四国支部大会では、口頭発表した内容をポスターセッションでも発表をするということにしているため、ポスターセッションでは、口頭発表の内容を踏まえて、さらに踏み込んだ議論がされました。規模の小さな会議だからできる良さだと思います。特に英語で発表した学生達にとっては、思うように内容が伝わらなかった部分をポスターセッションで改めて日本語で発表することで、研究成果についての意見をもらうフォローアップの機会となっているようです。

来年は、愛媛で第 9 回の支部大会が開催されます。